

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530557

研究課題名（和文） マスコミが対象とするスケープゴートの変遷

研究課題名（英文） Target of mass media -Scapegoat transition -

研究代表者

釘原 直樹 (KUGIHARA NAOKI)

大阪大学・人間科学研究科・教授

研究者番号：60153269

研究代表者の専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：スケープゴート、マスコミ、事故、災害

1. 研究計画の概要

災害や戦争で多数の人々が死亡するような事態が発生した場合、しかもその原因を特定することが難しい場合、人は明確な原因（責任の所在）を見出すべく努力するような志向性を持っている。そして責任所在のターゲットとして最も選択されやすく、また人々のフラストレーションを解消しやすいのは特定の人や組織集団である。次々にスケープゴートが変遷することは JR 福知山線の脱線転覆事故でも明らかである。この事故では非難の対象が運転手、車掌、慰安旅行やボウリング大会に参加した社員、事故当日夜の酒宴に参加した代議士、暴走行為をした社員、社員を殴った乗客、JR に寿司の代金を要求したマンション住民、JR を糾弾した新聞記者、過密ダイヤを作った JR 当局、それに社会の風潮等々あって枚挙の暇もないほどだった。本研究ではこのようなマスコミ報道と報道する側のステレオタイプやスケープゴート性の関係について検討した。

2. 研究の進捗状況

(1) 2005 年 4 月 25 日に発生した JR 福知山線脱線事故に関連するマスコミ報道を題材としてスケープゴートの変遷について検討した。具体的には、事故報道において非難される対象が変遷する過程、そしてそれぞれに対する非難量（記事数・非難程度）の変動を調べた。分析対象として新聞と週刊誌を取り上げた。新聞では読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の 3 誌と週刊文春、週刊朝日、サンデー毎日の 4 誌を用いた。記録は各記事の日付、頁数、誌名、非難対象、非難の根拠、非難主

体、非難程度、記事内容などについて行った。非難の程度については、「非難なし」、「非難」、「非難+感情評価」に分類した。コーディングは、新聞 3 紙と週刊誌それぞれに 1 名ずつ合計 4 名のコーディング責任者をおき、各責任者が基準に沿ってコーディングを行なった。分析の結果非難記事の対象として最初は運転士や車掌のような個人が多く取り上げられるが、次に JR 西日本（会社）がターゲットとなり、それから国土交通省・政府、日本の文化や社会と変遷していくような傾向が見られた。

(2) JR 事故以外の事件（例えば、0157 や SARS などの感染症の問題）も取り上げた。事件事故の種類により、被害者数や被害者の種類、加害者、事故や事件の発生日時、事件事故の性質は大きく異なる。それにより事件事故の種類によりスケープゴートの種類やプロセスが異なるのか否かについて検討した。その結果感染症の場合もスケープゴートの変遷が見いだされたが、事故ほどは明確ではなかった。

(3) 記事量の変動がもたらす記憶や認知のバイアスにより、スケープゴートがあたかも変遷しているようなイメージをもたらしている可能性がある。そこでこのようなスケープゴート変遷のイメージが生じる原因について検討するために刺激（ぬせ、へよ、めみ、るえ、ろゆ、わそ、のような無意味綴り）提示頻数の時系列変化が主観的判断に及ぼす影響について実験をおこなった。実験の結果、刺激提示パターン（最高頻度出現時）が一致していても、高頻度提示語は主観的頻度判断のピークが最も早く現れ、その後急激に減衰

することがわかった。一方低頻度提示語は主観的頻度判断のピークが最も遅く現れ、その後減衰せずむしろ増加することが明らかになった。このような認知的バイアスがスケープゴートの変遷のイメージの背後にあることが示唆された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

その理由として、第1に新聞や週刊誌の記事の詳細な分析を通して非難の対象が時間経過に従い変遷していくことを明らかにできたこと、第2に感染症などの健康不安についても分析し、事故との類似性と異質性を明らかにできたこと、第3に実験を実施して、スケープゴート変遷の認知的メカニズムを解明できたこと、第4に記事分析の機械化(コンピュータを使用した内容分析)がある程度可能になったこと、などが挙げられる。

4. 今後の研究の推進方策

今後は新聞記事のうち個人(運転手や車掌など)と集団(JR西日本)に関する責任帰属に個人情報の有無がいかに関与するかを詳しく調べる。また記事分析の機械化を進展させ、様々な事件や事故、感染症などの分析を行い、事例ごとの共通性と特殊性を比較検討することを考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、危機時における情報発信の在り方を考える 新型インフルエンザのクライシスコミュニケーションからの教訓、医学会新聞、2853、5、2009、査読あり

②吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、クライシスコミュニケーションはなぜうまくいかないのか、日本医事新報、4456、95-99、2009、査読あり

③吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、新型インフルエンザ発生時におけるクライシスコミュニケーションの問題、日本医事新報、4447、96-102、2009、査読あり

④釘原直樹、マスコミのスケープゴートイテ、阪大ニューズレター、140、12、2008、査読なし

⑤松本友一郎、釘原直樹、上司との関係評価、コーピングがストレス反応に及ぼす影響、心理学研究、79、166-171、2008、査読あり

[学会発表] (計22件)

①釘原直樹、植村善太郎、村上幸史、阿形亜子、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(15) テレビCM認知の歪み、日本社会心理学会第50回大会、2009年10月11日、大阪大学

②釘原直樹、植村善太郎、村上幸史、阿形亜子、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(13) 記憶バイアスに関する実験的研究、日本心理学会第73回大会、2009年8月27日、立命館大学

③釘原直樹、植村善太郎・村上幸史、マスコミによる非難対象の変遷過程の解明、日本社会心理学会第49回大会、2008年11月3日、かごしま県民交流センター

④釘原直樹、植村善太郎・村上幸史、マスコミが対象とするスケープゴートの変遷(9) JR福知山線事故に関する非難記事とその想起量のズレ、日本心理学会第72回大会、2008年9月21日、北海道大学

⑤Naoki Kugihara, Recency inflation effect of rare events on frequency judgment. Association for psychological Sciences Annual Convention (APS '07)、2008年5月1日、Chicago USA

[図書] (計3件)

①釘原直樹、有斐閣、産業・組織心理学への招待(白樫三四郎 編)第3章 集団・組織、2009、67-96

②吉川肇子、釘原直樹、岡本真一郎、中川和之、イマジン出版、危機管理マニュアル どう伝え合うクライシスコミュニケーション、2009、184

③釘原直樹 (監訳)、ナカニシヤ出版、テロリズムを理解する -社会心理学からのアプローチ-、2009、428

[その他]

ホームページ

<http://syasin.hus.osaka-u.ac.jp/index-j.html>